

企業から見たインターンシップ

UBS証券

理系学生にとって身近なメーカーやIT業界を就職先として考えている読者は多いかもしれないが、インターンシップという機会を活用して、視野を広げてみるのもいいかもしれない。自身の適性や、能力を活かせる新しい選択肢が見つかるかもしれないからだ。

中でも金融業界は理系人材の活躍が増えているフィールド。「理系学生と金融業界の親和性は高い」と語るUBS証券株式会社 株式本部長 高久宗史氏に、同社のインターンシップについて聞いた。



インターンシップで体感してほしい、理系の素養を活かせるエキサイティングな環境

理系に知ってほしい、素養を活かせる金融業界の仕事

「金融業界の仕事」と聞くと、あまり馴染みがなく、敷居が高いと感じてしまう理系学生は多いかもしれません。しかし、コンピュータの発展で金融マーケットのスピード、手法は劇的に進化しており、情報の量、伝達スピードともに急激

に増加しています。それらを論理的に処理する訓練を積んでいるのが理系学生なのです。昨今のビジネス環境では即断即決が不可欠。いかに迅速に合理的かつ論理的な判断ができるかが重要です。そこで理系のバックグラウンドが活きていると、私自身も感じています」そう話すのはUBS証券株式会社の株式本部長 高久宗史氏。高久氏をはじめ、同社では理系出身者が数多く活躍している。

例年同社の採用試験にエントリーする学生の比率は文系学生の方が多く、選考が進むにつれて理系の比率は高まるという、理系との親和性の高さがかげえる。とはいえ、金融業界を将来の仕事の選択肢として考えている理系学生はまだまだ多数派ではない。だからこそ、UBS証券はインターンシップを活用してもっと多くの理系学生に金融の仕事や会社、人について知ってほしいと考えているという。

金融ビジネスの最前線で取り組むリアルな課題

例年、UBS証券はサマリーインターンシップを実施しているが、プログラムを通じて学生に理解を深めてほしいのは、「仕事」「人」「会社」の3つだという。なかでも金融業界の「仕事」は、理系学

生にとって具体的にイメージするのが難しいかもしれない。それゆえ、実際の職場で業務体験できる同社のインターンシップは、仕事への理解につながる絶好の機会といえるだろう。

UBS証券のサマリーインターンシップで出される課題は、実際の業務に即した内容となっている。投資銀行本部であればM&A検討時の企業評価、株式本部であれば特定銘柄の分析といった業務に挑み、成果物の提出・発表が求められる。社員の指導の下、数日間にわたって業務体験ができるこのプログラムは、課題への取り組みだけでなく、フロアで行われる朝会など日々の業務も社員と共に体験できるという。

「実際のビジネスは本で読むのとは全く違います。現場では何が行われているのか、どんな能力が求められるのか、しっかりと見て理解を深めてほしいですね。そのほかにも、社員との交流を通じて「人」の魅力も知ってほしいと考えています。何をしたいかよりもどのような環境で働きたいかというのは非常に重要な視点だと感じています。社員との交流を通じて、こんな人たちが、こんな風土の環境で働きたい、そんな基軸を見つけてほしいですね」

人の魅力を感じてもらうために同社の

理系学生へのメッセージ



学生と社会人の大きな違いは、サービスを“受ける側”と“提供する側”の逆の立場にあること。学生は授業料を払って大学で学びますが、社会人は自ら価値を生み出すことで対価を受け取ります。ですから、就職活動では自分の能力がどんな形で世の中に貢献できるのか、どのような環境下であれば高いパフォーマンスを発揮できるのかを意識してほしいですね。理系の研究とは「他人が気付かなかった物事を見つけ出していく」ことですから、就職活動においてもその精神を活かして社会を見ていってください。メーカーやIT以外にも、自分の力を活かせるフィールドが見つかるはずですよ。それらを見極めるために一番いいのは社会人と話をすること。インターンシップは非常に有効な機会なので最大限に活用してほしいですね。

UBS証券株式会社 常務執行役員
株式本部長 マネージングディレクター
高久宗史

「金融業界は理系の素養を活かせる仕事として魅力的な選択肢であると感じています。ぜひインターンシップに参加し、金融という仕事の意義やダイナミックさを感じてください。インターンシップが企業と学生、お互いの理解を深められる場になればいいですね」

インターンシップでは、できるだけ多くの社員と接点を持てるよう、トレーニンググループなど各フロアで社員と交流しながら課題解決に取り組むスタイルを探っている。そのため、指導担当以外の社員がアドバイスをすることも珍しくない。さらに、終業後の懇親会で、ざっくばらんに会話することでより素に近い社員の人となりを感じることができるといふ。

イメージではなく、自分の目で判断しよう

「外資系金融機関」と聞くと何かしら先入観を抱いている読者が多いかもしれない。しかし、高久氏は学生の抱いている外資系金融機関に対するイメージの多くは実際と異なる場合が少なくないと指摘する。

「『会社』についても、自分の目であり

のままの姿を見てほしいですね。例えば、外資系企業は「人間関係がドライ」という先入観を持っている方が多いのですが、むしろチームワークを重視し、社員同士の交流も盛んです。そんなに特殊な人たちが集まっているわけではないんです」

同社のインターンシップに参加した学生からも、「忙しいのに親身に相談に乗ってくれた」「社員同士サポートしあって業務を進めている」といった声が聞こえてくる。インターンシップに参加したほとんどの学生が外資系金融のイメージを覆されたといい、「イメージ通りだったという学生はほほいません(笑)」という。

また、「外資系金融はハードワーク」というイメージが浸透しているが、「なぜそうなのか」という背景を知ってほしいと高久氏は続ける。「投資銀行部門を例に挙

げると、M&Aや企業買収といった、クライアントの将来を左右するような大事に関わっているわけですから、生半可な気持ちでできる仕事ではありません。そのような環境で、顧客にベストを尽くすために強い想いやプライドを持って働いている社員が多くいるのです。こういった事実を、現場で本人たちから話を聞いて知ってほしいですね」

知的好奇心が旺盛であれば、参加時点での金融知識は不問

いくら理系の素養が金融業界で求められているといっても、「金融の専門的な知識がないので不安」という方が多いかもしれない。しかし、同社はインターンシップ参加時点における金融知識はさほど重視していないという。「成果物に対するフィードバックは当然行いますが、私

達が重視するのは全体のクオリティよりもプロセスです。現在の知識で、どのような思考プロセスを経て結論を導き出したのかを知りたいですね」

参加時点での金融知識はばらつきがあっても当然で、適性と意欲があれば後からでも十分キャッチアップできると同社は考えている。それでは、どんな学生の参加を期待しているのだろうか。「知的な好奇心が旺盛な方を歓迎します。金融業界は変化の激しい業界。そこで活躍するためには、新しい物事を積極的に吸収したり、問題を解明していく姿勢が不可欠です。そんな方と一緒に仕事をして、私達も変化を続けていきたいですね」

インターンシップを通じて様々な角度からUBS証券という会社、社員、仕事を見て知ってほしいと考えている同社。それは、ありのままの姿を知ってもらうことができれば、参加者に魅力を感じてもらえるという自信の裏返しでもあるといえるだろう。

ディー・エヌ・エー (DeNA)

学生のための就業体験の場であるインターンシップだが、プログラムによっては参加した学生が「お客様」扱いされることも少なくない。そういったインターンシップは、参加しやすいかもしれないが、そこから得られるものも少ないというケースが珍しくない。

一方、参加者に求める水準の高さや、シビアな指導で注目されているのが株式会社ディー・エヌ・エー (DeNA) のインターンシップだ。学生だけでなく他社からの注目も高まっている同社のインターンシッププログラムを紹介しよう。



ビジネスで求められる “本気”の仕事を手感してほしい

短期間でも非常に中味が濃いプログラムで参加者の成長につながるインターンシップも存在する。

中でも、学生だけでなく他社からの注目も高まっているのがディー・エヌ・エー (DeNA) の短期インターンシップだ。同社に関心を寄せる学生だけでなく、コンサルや外資系金融企業を志望する学生も同プログラムに応募しており、参加者からの評判も高いという。なぜDeNAのインターンシップが注目されているのか、ヒューマンリソース統括部新卒採用グループリーダー 石倉秀明氏にその特色を聞いた。

「DeNAが実施しているインターンシップの特長は、私たちが「本気」であるということとです。数日間の合宿形式で、指導担当の社員 (メンター) と共にマーケティングで通用するレベルの新規事業を提案してもらいます」

DeNAの本気度合いは、このプログラムに参加する審査員やメンターの顔ぶれを見ても明らかだ。最終日のプレゼンテーション審査には代表取締役社長兼CEO 守安功氏、ファウンダーの南場智子氏を筆頭に、同社の経営陣らが参加さらに社外からビジネス界で著名な特別審査員を毎回招待しており、昨年はローソンの新浪剛史社長 (当時)、今年度は東

証一部へ史上最年少25歳で上場を果たしたり、センスの村上太一社長が特別審査員を務める。そして、期間中に学生を直接指導するメンターには、執行役員をはじめとする現場の最前線で活躍している社員をアサインするなど、その体制からも「本気」のインターンシップであることが伝わってくる。

**指導担当や審査員も本気。
お客様扱いをせずに徹底的に指導**

DeNAが今年実施を予定しているのは、新規事業立案型ビジネスインターンシップの『StuDIG』と、技術力を駆使して新規サービスを作り上げる『TechStudio』の2コース。双方に共通しているのは、新しいビジネス、サービス立案をビジネスレベルの水準で体験できるということ。参加者はチームに分かれ、メンターの指導の下、マーケティングで通用するサービスを生み出すことを目指す。最終日には審査員によるフィードバックと、優勝チームへの表彰が行われる。

『StuDIG』の新規事業立案は、旅行、書籍、人材サービスといったテーマが各チームに出題され、実際にビジネス化できる事業モデルの企画に取り組んでいく。『TechStudio』についても、与えられたテーマに沿って新サービスの企画を考

注目が高まる DeNAのインターンシップ

インターンシップと一口に言っても、数週間にわたって職場で業務体験ができる長期プログラムから、数日間で新規ビジネスの企画に取り組みビジネスコンテスト形式まで様々な種類がある。長期プログラムは期間が長い分、仕事理解が深めやすいといわれるが、4〜5日という

理系学生へのメッセージ



就職活動や中長期的なキャリアを考える上で、入社する企業の本当の姿を知れることは非常に重要です。とはいえ、学生の皆さんが採用選考における一連の流れだけで会社の実像を知るのは現実的にはかなり難しい。その会社にはどんな人がいるのか、その人たちは何を考えているのか、そして自分が本当に打ち込める仕事はどんなものなのか。インターンシップはそういったことを見極めることができる絶好の機会です。

社員らと数日間徹底的に議論を重ねて一緒に新事業を作り上げるという濃密な経験をする事で色々なことが見えてくるでしょう。新しいサービスを作りたい、成長したい、少しでもそんな想いがあれば、ぜひ当社のインターンシップをチェックしてみてください。

株式会社ディー・エヌ・エー
経営企画本部 ヒューマンリソース統括部
人材開発部 新卒採用グループリーダー
石倉秀明

え、プログラム期間内に実装を行い、リリースを目指す予定だ。ビジネスレベルを求めるメンターや審査員からのフィードバックはまさに、本気。「どんなユーザーを喜ばせるの?」「収益モデルは?」「実際に運用可能な構造になっているか?」「数百万人に使われることを考えてコードを書いているか?」など容赦ないフィードバックが次々飛んでくる。「相手が学生であっても、当社の社員は普段の仕事と同じレベルの指導をします。メンターもチームの一員として本気で優勝を狙っていますから(笑)」

だ学生視点だった事業企画やプロダクトも、フィードバックを繰り返して受けることで最終日には非常に洗練されたものになっていきます。過去には外部審査員がテーマに惚れ込み、ビジネスの実現化に向けて両社で具体的に検討が進められた企画もありました」

DeNAは、参加学生を、お客様、扱いたないことが、本人たちの成長につながると考えているという。実際、参加学生のアンケートからは、「厳しいけど、楽しかった」「ビジネスで求められる仕事のレベルを知れた」「自分の足りない部分に気づき、成長を実感できた」といった感想が寄せられている。成長の一例として、ビジネス現場における考え方をあげる学生は多い。「ビジネスの現場では前例も、正解もないことでも意思決定をして、前に進まなければならぬことが少なくある

りません。どっちも正解かもしれないし、不正解かもしれない。そんな状況でもいづれかを選択して前に進まなければならない。ビジネスにおける意思決定の難しさと重要性をこのインターンシップを通じて実感している学生は多いですね」

そのような体験を通じて、成長を実感できるのは、本気の仕事に触れられる環境があるインターンシップならではの魅力といえるだろう。

企画だけでなく、自分で作れる人材は強い

DeNAの二つのインターンシップは、事業やサービスを生み出すという点が共通しているものの、プログラミングが得意な方やものづくりに関心がある方であれば、自分でサービスを作り上げる「TechStudio」に注目してほしいと石倉氏は語る。「TechStudio」のメンター

も、当社の精鋭エンジニアが務めます。昨年はGoogle Chromeの開発を担当した社員や、ニコニコ大百科の初代開発者無料通話アプリomni(コム)立ち上げ時のエンジニア責任者がメンターとして参加しました。業界内でも著名なエンジニアと共にサービスを作り上げリリースまで共に取り組むことで、エンジニアスキルだけではなく、サービスを作り上げる上で意識すべきことやビジネスセンス、エンジニアとしての考え方など、多くのことを学べるでしょう。これからの時代、自分でサービスの企画立案から開発まで一貫してできる人材は非常に強い。DeNAでは部門間の人材流動性が高いこともあって、両方できる人材は少なくありません。当社のCEOの守安も元々は技術畑出身で自らビジネスを生み出してきました。「理系だから技術だけ」というのではなく、技術というベースを活かして活躍フィールドを広げてほしい。自分のポテンシャルを測るためにこのインターンシップを活用してほしいですね」

DeNAの本気が詰め込まれたインターンシップ。高いレベルの業務スキルや考え方に触れることで、自分の適性やキャリアを考える貴重な経験になるはずだ。本気だからこそ見えてくる、ビジネスの厳しさ、そして面白さを感じてほしい。

企業から見たインターンシップ

サントリー ホールディングス

食品メーカーといえば生物・農学系が活躍する領域と考える理系学生も多いだろう。しかし、飲料品製造・販売大手として知られるサントリーホールディングスが実施しているのは、工学系の学生に向けた技術系インターンシップだ。食品メーカーのエンジニアとは、どのような仕事内容なのか、具体的にイメージしづらいというのが学生の本音ではないだろうか。同社のインターンシッププログラムについて人事部の前田大輔氏に聞いた。



生産現場が直面している
実際の課題に取り組み

サントリーが実施しているのは、電気、電子、機械（機電系）や化学工学を専攻している学生に向けた「技術系インターンシップ」だ。コースは2種類で、学生側は1週間もしくは2週間のコースを選択。1週間のコースでも課題を与えられ、職場体験を出来るが、2週間になると、がっちり課題に取り組み、自分で解決プロセスを導くまでの過程を体験できる。「一口に機電系の学生といっても、それぞれ得意領域があります。参加者のバックグラウンドを考慮して配属やコーチャーを決定しますが、特にこの技術が必須というものはありません。求められるのは流体力学や熱力学など、工学系の学生が一般的に学んでいる基礎知識のみ。プログラム参加にあたって特定分野の知識が必要になる場合は、事前に課題として伝えていきます」

職場に配属されると、まずは工場全体の構造、設備などについての詳しい説明と安全講習が行われる。その後、現場で課題となっているテーマの問題解決に取り組み、最後はプレゼンを行う。

参加者が取り組む課題のテーマは、その時工場が実際に抱えている問題を取り



多様なエンジニアの 働きを知ることで、 自分の進むべき方向が見つかる 白

上げ、学生それぞれに異なったテーマが与えられる。実際に取り上げられたテーマとしては、中味殺菌用熱交換器の省エネ・省水提案や、コーヒー生産におけるレトルト工程時間削減と蒸気削減など。「飲料メーカーの生産現場には、どんな課題があり、どうやって解決しているのか」参加学生は、仕事のリアルなプロセスを体験することが出来るだろう。

そんなリアルな業務体験を通じて、初めて見えてくることは少なくないが、参加学生の「気付き」のひとつに、大学での研究とエンジニアの仕事との違いがあげられる。特にコストと納期の感覚は重要だ。実習期間中には、学生たちから度々「納期が足りない。間に合わないので残業したい」と声があがる。残業希望を受け入れる場合もあるが、学生には「本来仕事は与えられた時間のなかでやるのが前提。その点を強く意識して取り組んでほしい」と伝えていく。コスト面でも、どこまでメリットがあるか、明確な説明が期待されるのだ。

選択肢を広げ、より多様なキャリアを
考えてほしい

工学系のなかでも機電系を学んだ学生は、就職活動でそのまま機電系メーカーを受ける場合が多い。しかし、同社のインターンシップに参加すれば、食品メーカーでも機電系の知識を活かしてエンジニアが活躍しているのを実感できるだろう。「弊社のエンジニアの数は必ずしも多いわけではないため、一人一人が担当する仕事の幅は必然的に広くなります。幅広い業務を担当できる弊社のエンジニアとして働きたいと思う学生もいれば、もっと特定領域を掘り下げた仕事をした

理系学生へのメッセージ



やはり現場を体験できるのは大きなメリットです。会社がどう動いているのかを知ること、業界全体の雰囲気も感じ取れます。また、一つの仕事をすることで、どういう観点から会社を選ぶべきかがわかる。合う面も合わない面も参加することで初めて見えてきます。自分が本当に望んでいる仕事が明確になり、よい経験になるはずですよ。

(前田氏)

弊社のインターンシップは学生の自主性を重んじていますし、実際の仕事内容を詳しく知ることができます。仮説を立て検証するという仕事のプロセスが、のちの研究に活かすという学生もいて、研究をかたちにすることを目指している学生にはいい機会になるでしょう。将来のキャリアを考えるまたとない機会です。

(中村氏)

サントリーホールディングス株式会社
人事部
前田大輔／中村瞳子

いと思う学生もいるでしょう。それは当然です。むしろインターンシップは自身がやりたい仕事の方向性に気づききっかけになればよいと思っています。仕事人生は長いですから、数十年先を見据えて仕事のマッチングを考えることは非常に大切です。どんな働き方があるのかを知り、選択肢を広げることで、より多様なキャリアを考えてほしいですね」

**知ってほしいのは
新しいことに挑戦する姿勢**

仕事内容はもちろんだが、会社風土を知ってもらうのもインターンシップの狙いの一つだという。サントリーが大事にしているのは、創業者である鳥井信治郎氏の言葉、『やってみなはれ』に代表される新しいことに挑戦するマインドだ。

「工場のエンジニア」と聞くと、単調な作業の繰り返しをイメージする学生もいるが、実際の現場では改善ポイントが日々持ち上がってくる。「参加学生にも工場の現場で新しい価値創造を心がけてほしい」と前田氏は言う。新技術の導入や環境に対する提言、新しいことへの挑戦を大切にする、同社の風土を体感する絶好の機会だ。

「職業観としてチャレンジ精神を大切にしている社員がたくさんいるので、その点を知ってほしいですね」同社のインターンシップは、参加学生を一新入社員と同じように扱う。業務の指導だけでなく、終業後は社員と学生が飲みに行くこともあるそうだ。「現場も元氣な若者が来るのを楽しみにしています。お酒を造っている会社ですので、お酒の魅力も是非体感してもらいたいですね」

参加学生にとっては、職場だけではなく、社員の素の雰囲気を味わえるチャンスでもある。

参加後は学生が堂々としている

学生には得るところが多い同社のインターンシップだが、参加者自身の考え方や姿勢を変えることで得られるものはさらに多くなる。「一番大切なのは自分のやり方で問題をとらえ、解決策を導く自主的な姿勢です。コーチャーはつきませんが、わからないところがあればそのつど質問するという感じですので、手取り足取り教えてほしいという方にはハードルが高いかもしれませんが。課題は現場のエンジニアが取り組んでいるもので、実際にできるかできないかは各人の能力次第。学んできたことがどれぐらい通用するかを試したい学生に参加してほしいですね」

学生の提案が実際に反映されることもある。参加した学生には、その後課題がどうなったのかをフィードバックすることもあるという。何カ月か経ってから、自分があの時考えた問題が今こう変わっているとかかる。自分の考え方が違った結果になった場合には、なぜそうなったのかを考えてもらうきっかけにしてもらっているそうだ。

「現場からは、学生の意見は視点が新鮮で興味深いという声を聞きます。例えば工場のプロセスで、行程の効率化を検討する場合、どういう手段をとるか、社員と学生とでは全く発想が違います」

参加前は緊張していた学生が、参加後は物怖じしなくなっていることも多い。「行く前は工場の人たちって怖いのかなと思うのかもしれませんが。しかし、戻ってくるとみなさん実に堂々としていますね」参加後の学生は同社が大事にしている挑戦する姿勢や、仕事の内容への理解が飛躍的に高まっているという。こうした経験は、インターンシップ後の生活にも必ず活きるはずだ。

飲料メーカーという工学系とは一見縁遠い領域にも活躍の場がある。仕事の多様さや業界の雰囲気を肌で知り、将来のキャリアを考えるためにも、ぜひこの夏はインターンシップに挑戦してはいかがだろうか。